

「ダブリン三部作」考察

— 蜂起と内戦へのオケイシーの視線 —

藤木 和子*

On “Dublin Trilogy”
— What O’Casey Observed during the Rising and the Civil War —

Kazuko FUJIKI

Sean O’Casey dramatized the Easter Rising and the Irish Civil War in three of his plays, the so-called “Dublin Trilogy”. This paper studies how the ideal principle ended up being illusory, and how the lofty purpose of the war for liberation and independence degraded itself into simple retaliation killing of each other. In addition, this paper shows that the critical eyes of O’Casey did not fail to find the resilience of people to survive as well as an unextinguished tenderness as humans in a war-wasted society.

Key words: Sean O’Casey, Dublin Trilogy, Irish Drama

I

シヨーン・オケイシー (Sean O’Casey, 1880–1964) は「ダブリン三部作」(*The Shadow of a Gunman*, 1923, *Juno and the Paycock*, 1924, *The Plough and the Stars*, 1926) といわれる演劇作品を書き、1916年から1923年間の内紛とその戦いに直接的、間接的に関わる庶民の生活を描き、妄想と戦争がもたらす非人間的環境の中で苦しまなければならない庶民の姿を浮き彫りにしている¹。同胞同士が激しく戦う1922年から1923年にかけての市民戦争は1916年の復活祭蜂起にその源があるとオケイシーが考えている²ところから、この三部作を制作順ではなく、背景となる年代順に考察しながら、1916年のイギリスに対する反乱から続いた7年間の様子を作者オケイシーの目がどのように映し出しているかを見ていく。作品発表は、実際の事件が起こって間もないころのため、公演時には激しい批判と反響があった³。祖国解放のために命を代償にした愛国者の武勇を褒め称え、犠牲者を過去の英雄たちと同化させることがあとに残されたものを慰めることであり、望まれたことであった。しかし、オケイシーは盲目的に英雄賛美をする代わりに、流血と戦火に見舞われる町の様子とそれを受け入れなければならない市民の姿をありのままに映し出す

キーワード：シヨーン・オケイシー、ダブリン三部作、アイルランド演劇

※ 本学文学部英語英文学科

ほうを選択している。*The Shadow of a Gunman* のなかで「苦しむのは市民だ」(It's the civilians that suffer.)⁴とシェーマスに言わせているように、三作品には混乱の続く社会の中での市民の生活が写實的に描かれている。しかし、写實的とはいえオケイシー自身、1916年の蜂起軍の構成員であった Irish Citizen Army と関わりがあったため⁵、内紛を全くの部外者の一市民という立場では見られなかった。また、労働者保護のための組織であるはずの Irish Citizen Army が政治的大義のために1916年の蜂起に加わったことに反対の意見を持っていたため、失敗に終わった蜂起には個人的には批判的であった⁶。オケイシーが実際に見聞きした人々の経験は安アパートに暮らす登場人物の中で再現される。友人の家に身を寄せていた彼自身の経験はドナル・ダヴォレンに反映されるところもあり⁷、また、遠い戦地で息子を失った知り合いの医師の嘆きはベシー・バーゲスの声を借りて発せられている⁸。1916年の蜂起に対するオケイシーの個人的な非難を超えて、戦争に対する彼の態度、さらに、政治的対立からくる憎悪、混乱と貧困のなかを生き抜く人々を彼がどのようにとらえているかを見ていく。

II

オケイシーが1923年ごろまで続く内戦の源と考えた1916年の復活祭蜂起を題材している作品が *The Plough and the Stars* (1926) である。4幕からなるこの作品は、第I幕、第II幕が1915年11月に設定されており、第III幕と第IV幕が蜂起の起こった復活祭週になっている。第I幕、第II幕は蜂起の起こる半年前の状況を見せており、蜂起への準備、或いは、蜂起への高まりがどのようなものであるかを説明し、残りの2幕で実際の蜂起がどのようなものであるかを示す構造になっている。しかし、登場人物のほとんどは安アパートに暮らす労働者階級の人々で、祖国解放を熱く説いてまわる愛国者にスポットライトがあたっているわけではない。まず、第I幕ではジャックとノラ夫婦 (Jack / Nora Clitheroe) とその隣人たちが登場する。この夫婦と同居している従兄弟のコヴィ (the Covey)⁹ と叔父のピーター (Peter Flynn) は些細なことで口論が絶えない。二人がなぜ新婚夫婦のアパートに同居しているのかの理由は語られていない。しかし、部屋に余裕があるわけではなく、また、ノラがこの二人に喧嘩が絶えないのであれば他に移って行けばいい旨のことを言っていることから、やむを得ない事情がその背景にあることは了解される。家庭の内での論争に加えて、若いノラ・クライスローの立ち振る舞い、服装が年配 (といっても40歳くらい) の隣人の女性たちには不評である。特にノラの中流階級志向と受け取られるような言動には一言二言文句を言わないではいられない女性たちがおり、部屋の外でも喧騒がみられる。つまり、私的な場所でも、公的な空間でも心の安らぎがないという環境がまず設定されている。さらに、この共同住宅という小規模の公共空間を超えたところに、さらに大きな喧騒が準備されつつあることが分かるのは、折り合いの悪いコヴィとピーターに加えて、ノラの部屋の錠前を修理していた大工のフルーター (Fluther Good) が話題にしている「集会」である。この集会は Irish Citizen Army と Irish Volunteers の二つの組織が間もなく始めようとしている戦いのために兵士を集合させるもので、指導者にはこの戦いの大義名分を朗々と語る場になる。それは兵士はもとより民衆を鼓舞する目的もあり、この戦いの意義を知らしめ、さらに参加者を募ることも意図しているようである。集会の時間が近づくと労働者たちも道具を置き去りにして動員されるという集会を見物するだけ

でも戦いに参加する勇者の気分になれるのか、緑色の上着が Irish Citizen Army のユニフォームの色に似ている、ナショナル・フォレスターの格好でピーターは出かける。

若いジャックは妻に懇願されて Irish Citizen Army の活動は止めたが、自分が掲げるはずであった組織の旗を、今夜の集会では友人が誇らしく先頭を歩きながらその旗をもって行進する姿を羨む気持ちをおさめられない。妻の要望に従って活動は止めたという夫と、司令官になれなかったことが不満なのであろうという妻の言い分で、ピーターたちが出かけた後でもこの部屋の中で新たな口論が生まれかかったところに、ジャックが二週間前にすでに司令官に任命されていることが伝えられる。二週間前にその知らせを受け取ったノラは家庭を第一に考え、夫との幸せな結婚生活を守りたいとの思いからそれを処分してしまったことが露見されることになる。一方、ジャックは祖国を解放するという壮大な思いに突き動かされている。しかし、レンガ職人のジャックが政治的問題をどれほど理解して参戦を決意したかは疑わしい。司令官になれると思っていたのに、なれなかったことに失望したというノラの指摘を考えれば、祖国のためというより、司令官という軍服が象徴する外見だけの英雄姿への憧れがあったことも否定できない。緑色のユニフォームにベルト、レッドハンドバッジで留めた緑色の帽子を着用して集会に出向くジャックは、コヴィイから侮蔑的な視線を浴びせられたピーターのご自慢のいでたち、すなわち、ダチョウの羽のついたソフト帽にナショナル・フォレスターの緑色のコートを着て得意顔になっていたピーターと変わるところはない。

集会の様子を伝える第Ⅱ幕は、パブの外で行われている演説の声と、パブの内での客のやり取りという二つの波がリズムを作り上げている。集会での演説は4度聞かれる。長身の男性が群衆に向かって話しているというト書きがあるのみで、演説者が舞台上に姿を見せることはない。その男性のシルエットのみがパブの窓に映し出され、演説がパブのすぐ外で行われていることで、観客をも集会に参加させているような効果を生み出している。「流血は浄化であり、流血よりも恐ろしいものは隷属である」と祖国解放の是を説く言葉に真っ先に賛同の意を示したのは、パブで男にたかるような「酒場の女」、ロージー (Rosie Redmond) である。理想的で高尚な祖国解放の必要性を語りかける言葉が、社会的には非難を受けるような立場の女性の是認する言葉と並列されている。さらに、若いとは言えないピーターとフルーターがパブに飛び込んできて興奮気味に話をする。二人は演説に感動し、勇気が湧きあがるようだとか、剣を抜きたい衝動に駆られると言うが、参戦を決意するわけではない。さらに、戦場での流血を赤いワインに喩え、祖国への忠誠と神への奉仕を同一化するような宗教的比喩を含めて、流血が再生へとつながる唯一の道であることを説く演説者の高尚な理論が続く。枯れたバラの木を蘇らすために必要な水がなければ我々の血を流すしかない、コノリーとピアスの会話形で書かれている詩の行が重なってくる¹⁰。パブに立ち寄るコヴィイは社会主義者の立場を自負しているため、自由は労働者解放の自由のみ意味があること主張し、「鋤と星」(Plough and stars)¹¹の旗が政治的目的のために使用されていることに嫌悪感を示している。コヴィイの主張には作者自身の考えが織り込まれていると言われるが¹²、社会主義的見地が万全ではないことも承知の上で、コヴィイの主張にも皮肉や矛盾が込められている。それは、若かったころに参加した労働党集会で経験した不愉快な一面を語るフルーターにむきになって挑むコヴィイの姿にも見られる。経験のないコヴィイは本で知り得た知識がすべてで応用が利かず、相手を言い負かすこ

とはできない。この二人のあとにパブに姿を見せるのが、ノラに対して不満を持っていたアパートの住人のゴーガン夫人 (Mrs Gogan) とバーゲス夫人 (Bessie Burgess) である。カトリック教徒のゴーガン夫人とオレンジ党支持者で英国王を称える聖歌を歌うミサには必ず出席するというベシー・バーゲスとの口論は小さな英愛蘭戦争のようでもある。彼女たちは女性としての行動を含めた倫理観を語りあうのみで、窓越しに聞こえる演説に共感することはない。ただ、ベシー・バーゲスには大陸で泥と血の塹壕の中で戦った息子の思い出の方が彼女の心には深く残っており、流血は神の祭壇への捧げものという殉教に匹敵するような美辞も彼女には意味がない。酒場の内の客たちは演説に感動したと言いつつ赤いワインのような血を流す代わりに、ビールやウィスキーを飲み干している。

酒場に入ってきた人々の中で、集会での演説に心酔しきっている様子を見せるのが、すでに組織に参加しているジャックと、ジャックを呼びに来た仲間のブレナン (Brennan)、そして Irish Volunteers 軍の旗である三色旗を持っているランゴン (Langon) である。ランゴンは母よりも祖国が偉大であると公言し、ジャックは妻より祖国が偉大であると明言する。祖国のためには命さえいとわないと主張することで、演説の賛同者を獲得できたことが証明される。それまでの人々の反応は、この戦いへの意気込みには感動するが、自分には無縁のものという印象が強く、あくまで酒場という建物の外でのことという一線を引いた態度であった。しかし、この三人の兵士の態度は対照的で、まさに演説の一語一語に込められているかのようである。しかし、三人の登場の様子を示すト書きは、「興奮気味で、顔も目も輝いていた、自分の言っていることが分からないかのように早口でしゃべった。熱のこもった演説にすっかり魅了されてしまっていた。」(They are in a state of emotional excitement. Their faces are flushed and their eyes sparkle; they speak rapidly, as if unaware of the meaning of what they said. They have been mesmerized by the fervency of the speeches.) (177) と、三人の尋常ではない様子を語っている。三人の兵士以外の人物が演説と自分たちの生活は別物であると考えていたように、兵士たちもそれとはまた別の意味で、演説と自分たちに求められている流血の犠牲は別物であると考えている。演説の意味する血の犠牲は絵画に見られるような甘美なもので、ベシー・バーゲスの息子が経験したような泥と血の海のなかをものがき苦しむことだという実感はない。自分の話していることが何を意味しているのか分からないくらい興奮しており、実際に母を、或いは、妻を見捨てるということがどういうことなのか理解できない状態である。結婚直後は妻の希望のままに祖国解放という運動からは離れていたが、蜜月の期間が過ぎると再び Irish Citizen Army の将校という名誉ある自画像への憧れがクライスローの心を占めるようになる。中流階級に憧れるノラ同様に、クライスローが頭の中で描く勇猛果敢な己の姿は空想のおもむくままである。その意味では、表面的な言葉のみに魅了され、あたかも自分がそれに値すると勘違いするコヴィと同じである。

半年後に迫る、祖国解放という理想を現実化する準備がこのような形で行われていることが第 I 幕と第 II 幕で示される。魅力的に装飾された外観は容易に人を惹きつける。祖国への忠誠がどれほど聖なるものであるかを説かれれば、説得される若者も多く、ジャックたちのように自己犠牲ということを真に理解できないまま参戦する男たちもいる。男たちはそれぞれの頭の中に描く自画像に夢中になり、現実を見ていない。ノラの「あなたの虚栄心があなたを滅ぼす」という言葉に、また、息子の戦場での様子を語るベシーの言葉の

中に、これから戦いに挑もうとする理想家たちの運命が暗示されていることが第Ⅲ幕、第Ⅳ幕で証明されることになる。

第Ⅲ幕、第Ⅳ幕は1916年の復活祭週が舞台で、ゴーガン夫人の「一晩中、射撃の音で眠れなかった」とか、町の中心付近の様子を伝えるコヴィとピーターの台詞から、半年前に集会が行われた大通りはベシーが語った戦場に類似している。ノラはジャックを捜しに町に出向いてみたが見つからず、バリケードにいた女性から戦いの場で夫の名を呼ぶような行為は男の戦意を失わせるものでしかないと言われ、罵声を浴びせられ、失意の中でフルーターに助けられ、帰宅している。そのように罵られたノラが最前線で目撃したことは、戦闘で命を落とすことがどのようなことであるかを知らせるものとなる。路上に放置されている死体の顔は石に押し付けられ、腕は後ろに捻じ曲げられている。これはベシーの語った泥と血の海の中で死ぬことと同様のむごたらしい状況である。さらに、「私を笑う人の笑い声は怯えている、みんな怖がっている」(An' some o' them laughed at me, but th' laugh was a frightened one. . . I tell you they were afraid, afraid, afraid!) (185) という彼女の観察は、ロマンティックな美しい祖国解放論が流血という表現の中で真に要求していたものを暴き出している。ジャックの憧れた凛々しい軍服を泥と血で汚すことなく祖国解放は不可能であることを明らかにした言葉でもある。さらに、戦いの必要性が真剣に、高尚な言葉で説かれていた一方で、酒場のなかの無関心とも思える会話のやりとりが見られた第Ⅱ幕同様、第Ⅲ幕でも反乱軍の砲撃があり、指導者が共和国宣言をした、或いは、イギリス軍の砲艦がリバティ・ホールを攻撃したというような深刻な話題が飛び交う一方で、ピーターたちは小銭をかけてピッチ・アンド・トスのゲームをしている。ここでも祖国解放に命をかけている兵士たちの姿と、理想は理想として聞くだけでその日を生きるためにしのぎを削る庶民の姿があまりにもかけ離れていることが冷笑的に並列されている。時間つぶしのゲームが命がけの戦いと同列視されているのである。さらに、兵士の命がけの内戦を他人事のように思わせるのが、市民たちによる略奪行為である。戦闘の混乱に紛れて被害を受けた商店の物品が持ち出されるのを目撃したベシーが、アパートの住民にそのことを伝え、ゴーガン夫人も理論家のコヴィもそれに便乗し、酒に目のないフルーター¹³は酒場の商品を手に入れる。また、この一連の混乱状態は冗談だと思って友人を訪問したが、自宅のあるラズマインズへ帰れないと嘆く見知らぬ婦人の姿も、少数の人物のみがこの解放戦争を聖なるものと見なして必死で戦い、多数の同胞は冷静すぎる目で傍観していることを物語っている。それ故に、このような同胞のために瀕死の姿をさらすのはむしろ滑稽とさえ映りかねない。それが、第Ⅲ幕の最後に登場する三人の兵士の姿である。

祖国独立のためなら負傷しても構わないと第Ⅱ幕で豪語していたランゴンがブレナンに抱えられ、そして二人を援護するように銃を持ったジャックが登場する。交戦についてブレナンはジャックが撃たなかったことを非難すると、ジャックは同胞だったから撃てなかったと答えるものの、ブレナンはアイルランド人なんてどうでもいい (Irish be damned!) (193) と、自分たちに襲いかかってくる者は容赦しないと激しい憎悪を見せる。この反応はこの戦いが誰のためのものであるかという根本的な理念は消え去り、戦場では単なる報復合戦としか受け止めていない兵士の姿を明らかにしている。また、ジャックの姿を見て喜ぶ妻を、結局は拒絶することになるジャックが「君の傍を離れなければよかったのに」(I wish to God I'd never left you.) (194) という本音をみせたものの、愛国の兵士、

祖国を救う英雄という仮面を外すことはできない。必死に愛を求める妻の姿は英雄の妻の姿ではなく、世間の物笑いの種でしかないという考え方にとらわれたジャックはここでも体面を保つことを選び、本心を隠すしか自己の描く英雄像のプライドを保つことができず、葛藤するジャック・クライスローの姿が強調されている。

ジャックが無残にも置き去りにしたノラに残されたのは早産児の死である。愛の結晶が死であることはジャックにも不吉な影を落とす。愛を拒絶したジャックの壮絶な死は同胞のブレナンから伝えられる。胸と腕を撃たれ、挙句の果てにはジャックがいた建物が火に包まれ、劫火の中での最期となる。それは泥と血の海同様に、残酷な戦場の姿である。ジャックの最期の言葉を伝えに来たブレナンの目に映るノラには、彼女の夫が勇敢な最期を遂げたことは意味のないことを知る。惨たらしい死をいかに武勇に満ちた言葉で飾ってみてもむなしが残るのみである。集会での演説が美しい言葉で装飾されていたように、死者を称える言葉も荘厳な響きで飾られている。しかし、現実にはジャックのように、また、おそらくランゴンのように、命を救う手だても間に合わず、最期の瞬間の心のよりどころである宗教的意味を持つ司祭からの秘跡も受けることなく、ただロザリオだけを握らされた手に血の海を感じつつ、砲弾の炎のなかで息絶えていくのが愛国のために殉死していく兵士の現実の姿である。ジャックがノラの手を最終的に手放した時から彼女の心はバランスを失い、子どもが死亡したことも知らされない。その子がゴーガン夫人の娘と共に棺に納められていることさえも知らないし、夫ジャックの死も知らないままである。

このように屋外でも屋内でも死が蔓延っている現実が明らかになる。ジャック・クライスローのように火焰のなかで死を迎えた者、ノラが目にしたような路上で亡くなる人、納棺されてもお敵兵の監視を受け、騒乱の中にいなければならない死者もおり、死後の安らぎが与えられていない。狙撃兵確保のため住民たちを隔離しようとする英兵が反乱軍の狙撃兵の卑劣な戦い方に不満を漏らした時、フルーターは反乱軍と英軍の装備の違いに言及し、始めからフェアプレイなど見込めない戦いであったことを指摘する。少数の素人集団と訓練を受け武器も充実している大軍との戦いでは勝ち目がないことは誰の目にも明らかであったことが示唆される。実像を見せず、影としてしか姿を現さなかった指導者の語ったことは、影のような死の暗さと呼び寄せたことになり、結局は「不必要な死ではなかったのか」¹⁴という疑問が頭をもたげてくる。ジャックが肉体的死を受け入れなければならなくなった時、ジャックに拒絶されたノラは精神的死の淵に立ち、正常な思考力を失いつつあった。三日三晩寝ないでノラの世話をしてきたベシーがノラを守るために窓近くに行ってしまった結果、狙撃兵に間違われ、英兵の銃弾の犠牲になってしまうのは不条理とさえ感じさせる。集会の演説は実際のピアスの演説を基にしていると言われるが¹⁵、第Ⅱ幕の最初の演説のなかで、流血は浄化で神聖なものという言葉の前に、「初めは間違えて違う人を撃つかもしれない」(We may mistake in the beginning and shoot the wrong people.)という一文があったことは¹⁶、戦争での人の命の扱われ方の不条理が正論として受け入れられることを示している。第Ⅰ幕の終わりで、前線に赴く兵士たちの行進を見ながら、恐ろしい危険な闇の中に向かって進んでいると、「詩篇」の語句を一部変えて悪態をついていたベシーは、第Ⅲ幕の終わりでは同じ「詩篇」の箇所をそのまま唱え、神の加護を求めながらノラのために銃弾の飛び交う街中に医者呼びに出していく。ベシーは戦地に息子を送り出し、その悲しみも恨みも周囲にぶつけるような乱暴な言動が見られる

が、病弱なゴーガン夫人の娘にそっとミルクを手渡す優しさも持っている。ゴーガン夫人はベシーの姿を引き継ぐかのようにノラの面倒を見ようとする。言葉だけの理想論と残虐すぎる戦禍の現状の中で最後に見られるのは困っている人に差し伸べられる、理屈抜きの助けの手である。ノラを慰めていたベシーの「勇気を持ちましょう」(We'll have to be brave.) (206) の言葉は兵士が使う意味ではなく、長く暗い夜を耐え忍び、希望をもたらす朝を待つために弱気になってはいけない生き方を伝えるものであったが、命の恩人の命を奪うことになったことさえ理解できない今のノラの姿は彼女から奪い取られたものがかに多岐にわたるものであるかを示している。

III

The Shadow of a Gunman (1923) は1920年为背景になっており、1916年の蜂起から4年が経過している。蜂起が失敗に終わったとはいえ、*The Plough and the Stars* のなかで触れられていた共和国宣言を強く支持する組織とイギリス政府の軋轢は増し、武力的衝突が頻繁に見られるようになった頃である¹⁷。この作品の舞台も前作同様の貧しい共同住宅で、起床する気配のないシェーマス (Seumas Shields) をなんとか起こそうとする隣人たちのかけ声と激しくドアをたたく音、そして、部屋の中では眠りの神に抱かれて熟睡していたと言うシェーマスの言葉からも、部屋の外の騒音がやがてこの部屋のなかへ侵入してくる気配を暗示させる始まりである。家が揺れるほどのノックの音にも起きない友人に必要なのは地雷だと冗談が言える居候が詩作に興じるドナル (Donal Davoren) である。悪意のないこの冗談は、当時では爆弾破裂が珍しいことではないことを示唆すると同時に、後に明らかになるシェーマスの友人マクガイア (Maguire) が黙って置いていった鞆の中身に言及するものとなる。ドナルがなぜ居候状態になったのかは、ピーター、コヴィの場合と同様に説明はない。作者オケイシーの社会主義的思考方の一端をコヴィに語らせていたように、この作品中においてもドナルにオケイシーの経験した一面を重ねているところがあるとも言われている¹⁸。

詩人シェリーの詩劇 *Prometheus Unbound* の冒頭のセクションからの行を暗唱し、永遠の悲しみを訴えている悲劇の主人公を気取り、その主人公を作り出した詩人であるかのように、虚構の自画像に酔いしれているのがドナルである。この安アパートの住人達にはドナルは正体不明の不思議な人物に映り、シェーマスの部屋に同居し始めたことも重なってか、「追われている身」(on the run) であると受け止められている。家賃滞納で立ち退きをせまられているシェーマスは日用雑貨を行商することで生計を立てている。商品には不良品も含まれ、行商に出かける時間も決まっているわけではないのか、その日の起床は昼過ぎである。そのためミサに与れなかったことを悔やむシェーマスの信仰心は現状のブラック・アンド・タンズ¹⁹ を怖がっているように、来世での神の懲罰を心配しているからだどドナルに分析されるくらいのものでしかない。しかし、銃弾の飛び交う音や祖国に名誉をとという叫びが、神への祈りの言葉にとって代わり、聖水の代わりがガソリンだというシェーマスの観察は、全般的に精神的核であるはずの宗教的典礼がないがしろにされている現状を語っている。また、かつては愛国主義の団体に属していたこともあるシェーマスの目に映る祖国のイメージが激変していることも彼はドナルに説明する。キャスリーン・ニ・フーリハンやダーク・ロザリーンが苦しむ美しい乙女の姿で描かれ、その乙女に黄金

の玉座と幸せを約束する若者の姿が美しく読まれる詩²⁰の含意するものこそが、シェーマスをロマンティックな愛国主義者にした要因の一つである。しかし、今のシェーマスが見る祖国の姿は「荒れ狂う悪魔」(a ragin' divil) (110)と変容し、昔の「歌を歌い、ハーブを奏でていた」嘆きの美女のイメージはすっかりなくなっていることを伝える。あたかも中世の騎士が美しい姫君の名誉回復と幸せのためであればいかなる難勦もいとわないというロマンティックなイメージがシェーマスの持つ祖国の姿であった。しかし、愛国主義者で祖国を愛する気持ちはあると公言しながら、積極的に行動を起こす組織に入っていないのは、シェーマスがかつて命がけて守りたいと思わせた清らかな嘆きの乙女の祖国の姿が消滅したためだと考えられる。ある意味ではドナルのような、詩行の醸し出す雰囲気酔いに酔いしれるロマンティックな段階を超え、シェーマスは現実直視の段階に足を定着させていると言える。武力的にしか愛国を表せない組織に入れば、ドナルの言うように、ブラック・アンド・タンズの監視の目を常に警戒し、恐れなければならないのが現実である。

ロマンティックなドナルに興味を示すのはミニー・パウエル (Minnie Powell) である。両親を幼くしてなくし、早くから自立を余儀なくされている 23 歳の女性は、シェーマスの部屋にお茶用のミルクを少々求めて、シェーマスの出かけた後、入ってきて、ドナルと話す機会を持つ。若い男女は会話を楽しもうとするが、教育を受ける機会のなかったミニーの知識とドナルの知識とは全くかみ合わず、話の内容を深めることはできない。ただ、ミニーはシェーマスの部屋の居候であるこの青年が逃亡中の身であることに興味津々であることは明白である。自分が周囲からそのように見られているとシェーマスから聞かされていたドナルも、自分が逃亡中のガンマンであると周囲に受け取られていることをミニーとの会話で知る。その英雄的なイメージがシェリーのプロメテウスと重なるのか、ガンマンでも逃亡中でもないのに、あたかも伏兵攻撃も恐れぬ勇者であるかのような発言までしてしまう。敵から身を隠している愛国の勇者という仮面は、いかなる手段を使っても姫君を守る美しき騎士の姿にも重なり、若い娘の称賛を一身に浴びるにふさわしいロマンティックな自画像に満足しているドナルがいる。

ミニーの考える愛国の戦士であれば、それが麗しの美女でなくても、深刻な不満を抱える隣人に援助の手を差し伸べるのに適切な人物のはずである。ミニーと同様に、身を隠している愛国の闘士と信じているドナルに支持宣言をするトミー (Tommy Owens) の後押しもあり、ヘンダスン夫人に付き添われてやって来た近隣の男性ギャロハー (Gallogher) は、自分の被っている不服をドナルに陳情する。アイルランド共和国軍 (the Irish Republican Army) 諸氏宛ての陳情書はドナルが IRA の党員であることを前提としており、ドナルが上層部にそれを提出し、ギャロハーの問題を武力行使で解決してくれることを願うものである。また、自分たちの意向に沿って訴えを扱ってくれる裁判所がないため IRA にしか頼めないという主旨が、ドナルを IRA の要員と考えての依頼であることを強く印象付ける。同席している隣人たちが上出来だと絶賛する陳情書も慣れない法律用語の使い方には不明瞭、不正確な箇所も見られる。しかし、そこにいた誰よりも知識のあったはずのドナルはそのことを指摘しないし、その陳情書を持っていく資格も、意思もないとも言わない。周囲からの膨れ上がった英雄のイメージを否定するには遅すぎたドナルであるが、本人はそれを自覚していない。

しかし、ドナルにとっては何でもないはずのこの依頼の件は、漠然とした逃亡者でしか

なかったはずのドナル像が周囲の人々の中で確定された瞬間である。ミニーの目に映る英雄像を永続させたかっただけのドナルだが、その日の遅くに帰宅する隣人から、あの時同席していたトミーが酒場でどのようなことを吹聴していたかをドナルとシェーマスは知らされる。参戦を強く希望していると主張していたトミーは、自分が愛国の戦士と旧知の仲であるかのような口ぶりであったというのだ。祖国解放のために身を捧げる誇らしい知人を持つことは、自分も同等の称賛に値するかのように錯覚している。参戦への意気込みを熱く語っているが、実際に参戦への呼び出しがあった場合、トミーの耳に聞こえるようにするためにはプラスバンドが必要だと言ったミニーの言葉がトミーの本心を暴露している。愛国心を物怖じしない勇ましい言葉で語ることと実戦に赴くことは別である。*The Plough and the Stars* のフルーターは集会の演説を聞いたあと酒場で、国のためなら死さえいとわぬほど興奮したと言って酒を飲み、半年後に町が戦いの場になったときは、兵士として参戦するのではなく、壊された店からウイスキー瓶を略奪する庶民のなかに加わっていた。フルーターという人物が、父親に似て酒に目が無いトミーに受け継がれているようだ。参戦のみが唯一の奉仕と考えているトミーに、ただ待つことも仕えることになることをドナルはミルトンの詩²¹を引用して説明するが、ミニー同様トミーにもドナルの言葉の奥にある意味を共有する知識はない。しかも、ドナルが暗示したミルトンの詩の語り手のような、思いを行動に移せる人と同じ思いでただ立って待つという思慮深い謙遜な心の持ち主は見当たらない。シェリーのプロメテウスのごとき勇姿を自らに重ねたいドナルが、民衆救済のために努力している詩人の意向に反して、民衆は詩人を亡き者にしようとしているともらした不満は、内戦ゆえに町中に浸透している不安と騒乱がどれほど市民の生活に悪影響を及ぼし、知的なものを受け入れようとしない社会であるかを無意識に伝えているとも言える。伏兵攻撃で死亡したガンマンの最期を報じる新聞記事にマグワイアという聞き覚えのなる名前を見つけたドナルは、ガンマンとして一人歩きを始めている虚像のわが身に不安を感じる。

シェーマスの恐れていたブラック・アンド・タンズの突入捜査による詰問にアパート住民は慄く。その標的が自分の可能性を窺わせる言葉に縮み上がるドナルは昼間の陳情書的一件をシェーマスに説明する。その陳情書は彼のポケットから見つかり、何とか処分できる余裕はあったが、約束の時間に遅れてやって来たシェーマスの友人マグワイアの置いていったカバンの中に爆弾を発見した時の二人の反応は英雄のそれとはほど遠い。突然の捜査の理由がドナルにあるのではないかと心配してきたミニーは、二人の部屋にある爆弾の入ったカバンを自分の部屋に持ち帰る決断をする。あたふたするだけの無力な二人には、そのカバンを持って行こうとのミニーの申し出は、時々シェーマスが口にする聖人に助けを願う祈りが聞き入れられたかのように二人には映る。ドナルのためという思いで、疑惑をかけられるものを取り去ろうというのが彼女の意向である。しかし、女性には手厳しいことはしないであろうというミニーの予想に反して、彼女の部屋を総ざらいして見つけた大量の爆弾に対しては、敵は女性であろうと容赦はない。連行されるミニーの最後の姿は愛国者のスローガンである 'Up the Republic' と叫ぶ姿であることが知らされる。ミニーはドナルを守るためだけに、シェーマスの友人が残していったカバンを持っていった。シェーマスはミニーがそのカバンの在り処を言わないことのみをひたすら望んだ。そして、ミニーはその思いを受け止めたかのように、二人の名前は口にしなかった。第I幕の終わ

りで、ロマンティックな雰囲気の中なかでドナルと自分の名前を並べて書いてみた。その紙片を持っていたミニーのロマンティックな一面もドナルの名前が彼女の血で判読不可の状態になったことで、はからずもミニーは彼の素性を守り抜いたことになる。しかし同時に、それは彼女の中からドナルが消え去ることであり、ロマンティックな思いと愛国の戦士の姿を担わされた彼女の死はその両方を消滅させたことになる。しかも本当の逃亡中のガンマンはドナルではないことも知らず、自己満足的なロマンティックな妄想のために身代わりの死という代償を支払ったことになる。かつて、キャスリーンのような、或いはロザリーンのような祖国に恋していたシェーマスが今は単に英兵に怯える粗雑な青年に成り下がっているように、ドナルのロマンティックな一面も削がれていく可能性が潜んでいる。

英兵の突然の詮索を受けたオレンジ党員の隣人の妻は、夫が王に敬意を払う行を強調している聖書の箇所にも英兵が目もくれず、聖書を投げ捨てるような行為に及んだことにショックを受けている。投げ捨てるという行為への異論もさることながら、聖句の中なかでも王への敬意を強調する箇所を開いていたのは、英国王への忠誠を示すためであったが、それが英兵に理解されなかったことに憤慨している。さらに、武器を捜しているはずの英兵が夫の持っている酒を取り上げて狂喜する様子も、深夜の襲撃にも似た敵捜しの行動が本来の意味から逸脱していることを伝える一部分となっている。個人の欲が先に立ち、武力による優勢を押し付ける行為のみが先行し、この内戦の意味が失われつつあること、戦争は単なる報復戦にすぎず、立場が違えば双方ともテロリストとして非難し合う側面を持ち合わせていることを暴露している。

ドナルはミニーの死の責任は自分たちにあることを口にするが、それを元に戻す手段のないことを主張するシェーマスに返す言葉はない。人間のための善行ゆえに苦しむプロメテウスの英雄像を今のドナルは自分のなかで持ち続けることはできない。自分たちの決断がミニーを死に至らしめたという思いはプロメテウスの意向とは異なる。我が身の保身のための決断がひとりの罪のない娘の命を絶ったという思いは、ドナルのロマンティックな思いに終止符を打たせることになるだろう。かつてロマンティックな祖国愛に燃えていたシェーマスが残酷な現実を知り、保身のための行動しかとれなくなったように、ドナルもいずれシェーマスのような生き方に倣う可能性がみられる。しかし、深夜の突然の騒動が収まりかけるころには、ブラック・アンド・タンズの詰問に怯えたことはなかったかのように話をするシェーマスと隣人のオレンジ党員の男性は、敵の強迫的な発言にも堂々と対処したという仮面を外すことはできない。そこには別の意味でのロマンティックな虚像の英雄的自画像の断片にすぎりつく哀れな人間の傲慢さが見られる。しかし、その些細な虚栄が恐怖と不安を抱える人間の自尊心を支えるものになっていることも見逃せない。生存のためのそのわずかな虚栄心を大きく揺さぶるミニーの死は、ロマンティックな思いと愛国の戦士の死、さらに無関係な市民の死さえも要求するのがこの戦いの実像であることを示し、まさに 'Romantic Ireland's dead and gone'¹²² という一行が響く終焉である。

IV

Juno and the Paycock は1922年を背景としており、前作の背景からほぼ2年が経過している。1921年にアイルランド自由国としての第一歩を踏み出した祖国は新たな戦いの形を生み出すことになる。それまではイギリスという共通の敵が明確であったが、自由国

のもとで制限された自治権を是認する一団と、それに強く反対する一団の衝突が見られ始める。つまり、昨日までの同僚、同じように祖国を愛する者同士が敵味方になって戦うことになる。イギリス自治領としての枠内での自由国という立場に反対し、自由国の正規軍に対して、イギリスからの完全独立を目指す過激な共和国主義者 (Diehard)、或いは、非正規軍 (Irregular) として登場する愛国の戦士たちがこの作品には登場し、戦いの形が前2作品より少し異なるという背景が前提となっている。

前2作品と同じような貧しいアパートに暮らす一家には1916年の蜂起に参加した青年ジョニー (Johnny Boyle) がいる。年齢は明記されていないが、姉が22歳と書きで記されているので、22歳以下ということになる。6年前の蜂起の頃には10代半ばであろう。まだ、政治の仕組みも駆け引きも分からない頃に *The Plough and the Stars* に描かれていたような戦いに参戦したことになる。ジョニーは蜂起指導者の祖国愛を語る熱い演説にクライスローやランゴンが催眠術をかけられたかのように魅了され、祖国解放のためには武器を取ることは当然だと信じ、あたかも、ロザリーンのような美しい乙女のためには命さえいとわれないと感じた一人であるかも知れない。しかし、命は差し出さなかったものの、ジョニーは片手を失い、腰に銃弾を受けたため、以前のようには歩けない。作品冒頭で姉メアリ (Mary Boyle) の読む新聞記事に6年前の勇者であるはずのジョニーは異常な反応を示す。同じアパートに住む幼なじみの青年ロビー (Robbie Tancred) の残酷な死を報じる新聞記事は、伏兵攻撃で凶弾に倒れたガンマン、マグワイアの死亡記事の延長である。前作には居住空間の内部に外部の騒音が侵入してくる構成が見られたが、この作品の冒頭でも、新聞という媒体を使って家の内に忍び込もうとしているものが若者の死であることが暗示される。ロビー・タンクレッドが伏兵攻撃によって死亡したことの原因がジョニーにあることは第Ⅱ幕後半から徐々に明らかになる。寝泊まりの場所を一カ所に固定しないというジョニーの生活ぶりは秘密行動をする愛国者にはよく見られた行動であったようだ²³。居場所を固定せず、人目を避け、怯えて息をひそめるように暮らしているジョニーは自分が追われている身であることが分かっていた。それは、若い美女から勘違いされて英雄気取りになっていたドナル・ダヴォレンの悦に入っている姿でもなく、蝶を捕まえに行くので今日はシェーマスと仕事に行けないと言って、黙ってカバンを置いていき、秘密裏に行動するガンマンのマグワイアの姿でもなかった。ドアを激しくたたく音に怯え、姉たちの何でもない言葉に神経をいらだたせ、落ち着かない様子ジョニーを訪問したのは一人の若者である。この若者の口からタンクレッドの隠れ家の情報を漏らしたのがジョニーではないかと疑われていることが明らかになると、ジョニーは「僕はアイルランドのためにできることはした。(Haven't I done enough for Ireland!) (50) と、無くした片腕と歩行困難な状態を強調するが、「これで充分ということはない」(Boyle, no man can do enough for Ireland!) (50) という返事が返ってくる。それは、あたかも死以外には愛国精神を示す手段がないかのような応答である。充分と言えるのは、ランゴン、クライスロー、さらに、勘違いの末に愛国を叫びながら銃弾に倒れたミニーの姿であり、また、ガンマンのマグワイアの死であり、マグワイアと同様に複数の銃弾を身に受けたタンクレッドの死である。また、仲間を裏切ったことで人と会うことを極力避け、自分の犯した罪がいつ暴かれるのか、いつその報いを受けなければならないのかに怯えて暮らす姿は、罪のないミニーを死に追いやったという負い目を抱えて生きていくドナル・ダヴォレンの姿である。

自らのことを臆病者で卑怯者と繰り返していたドナルの言葉はジョニーその人でもある。つまり、あの崇高で高尚な理想論に燃えた1916年の戦いに参加した若き戦士の6年後の姿である。命を落としたランゴンやクライスローの真の姿を間近に見た年若き同僚の姿とも言える。「原則は原則」(a principle's a principle)と声高に叫んでいたスローガンに自信が持てなくなっているジョニーの苦悶する不自由な姿に、蜂起の時に命を亡くした戦士と、蜂起後に敵味方と別々の形で祖国愛を示さなければならなくなった同胞同士の姿が重なる。さらに、間違えられて死を迎えなければならなかったミニー、ベシーの理不尽な最期さえも包括される。

ジョニーの姉、メアリはノラのように自らの環境に満足せず、貧しいアパートで一生を送る気持ちはない。父親ジャック・ボイル (Jack Boyle / Captain Boyle) が無価値だと非難する読書の時間を持ち、母親ジュノー (Juno) が理解しようとしないう労働運動の意義を唱える。弟同様に「原則」という言葉を振り回すような主張は、母親の目には虚言としか映らない。何度でも国のために立ち上がれると豪語する息子ジョニーを見て、片腕のない息子には労働も祖国独立のための活動も不可能であることを母親は知っている。解雇された同僚のためにストライキを実行するという娘の着飾り方が、安い賃金の労働者の姿とは見えず、労働者保護を訴えるという論が雇用者には通じないことも母親には分かっている。「原理」という抽象的な概念のみで行動する子どもたちと、明日の食べ物を心配して暮らしていかなければならない母親の違いである。メアリは彼女同様に労働運動に興味を見出し、労働に従事することが生活を向上させることと信じているジェリー (Jerry Divine) と付き合っていた。労働運動に強い関心を持っていたオケイシーは労働の意義の一面をジェリーに語らせている。怠惰で職に就こうとしない父親と、貧困がどのような家庭環境を生み出しているかという背景の中で、労働の意義と就労の約束してくれる経済的安定を説かせるが、コヴィの場合がそうであったように、ジェリーの理論もどこか説得力に欠けるものがあり、メアリの愛を獲得できるものではなかった。夢を食べて生きているような父親と苦勞する母親のような生活からの脱出を可能にしてくれそうに思えたのはジェリーではなく、この一家に遺産の話を報告に来たベンサム (Bentham) という青年である。死亡した親族の遺産を父親が受け取るという知らせはこの一家に外部から持ち込まれたもうひとつのものである。内戦とは無縁のものだから、メアリに大きな影響を与えるもので、彼女の姿勢のなかに女性としてのノラの姿が重なるところもある。

教師をしているが、将来は弁護士になりたいという野心を持つベンサムがメアリの目にはジェリーよりも洗練されているように映る。しかし、この環境からの脱出のみに夢中になっていたメアリはベンサムの本性を見抜くことができなかった。遺産がボイル家に入っていないことが明らかになるころ、ベンサムはメアリの前から姿を消し、イギリスへ行ってしまふ。自分の家族の品位に欠けるところにベンサムが嫌悪を感じ、捨てられたのではないかと思うメアリだが、ベンサムのイギリス行きの原因は、遺言書の作成不備のためであり、しかもその作成不備はベンサムにも責任の一端があることが分かってくる。弁護士の野望をかなえるためにボイル一家に入ってくる遺産という持参金付のメアリを選んだ男は、己の失敗を追及されないために、さらには、妊娠しているメアリとの結婚を強制されないために、逃げた可能性が高い。仮に遺産を受け取りベンサムと結婚したとしても、野心家の夫のもとでメアリの思い描くような結婚生活が送れるかどうかは疑問である。新婚

まもないクライスローが妻よりも祖国解放運動に情熱を傾け、妻への愛情より祖国への愛を選択した結果、夫に愛を拒絶された妻ノラが残された。夫からの愛の拒絶、早産児の死後、精神に異常をきたし始めたノラを、クライスローの同志ブレナンは癒すことはできない。結婚以前にノラと付き合っていたことがあるというブレナンでも、ノラの中からクライスローの姿をかき消すことはできない。また、ベンサムに捨てられたメアリは以前付き合っていたジェリーと再会するが、「原則」に凝り固まっているジェリーはメアリの過ちを許すほどの寛容さは持ち合わせていず、メアリもベンサムを憎みきれない。夫に拒否され、婚約者に捨てられた結果になっても、理屈抜きで相手への愛を公言している共通点が二人には見られる。

メアリの人生を大きく変えた遺産相続という、まるで天から降ってきたような貧困救済の手だては、この家の家長であるジャック・ボイルをさらに就職から遠ざけ、享樂への道を助長させることとなる。この遺産の話がなくとも彼の酒好きと空想癖に変化はないであろう。彼は *The Plough and the Stars* のフルーターのように酒好きで、*The Shadow of a Gunman* の空想家のドナルを合わせたような人物である。ボイルは無職なのに、就職の可能性がちらつくとならば仮病をつかって職に就こうとはしない。ドナルは憧れの詩人の作品を幾度か引用し、自分でも詩を書いて一流詩人を気取っていただけであるが、ボイルは事実とは全く無縁の事柄をあたかも自分の経験した真実のように語っている。一度だけの乗船経験は、まるでコロンバスの大航海のような経験に変わってしまい、周囲からは船長 (Captain) と呼ばれることに満足している。それを助長させるのが、飲み友達のジョクサー (Joxer Daly) である。よほどのことがない限りボイルの嫌がることは何一つ言わない、ボイルの共鳴板のような役割を演じ、ボイルの虚栄心をくすぐり、金銭的に利用できるだけ利用するような男である。ドナルのように同室に住む居候ではないが、ボイルへの甘言が酒代になることは十分承知している居候の飲み友達である。ボイルを誉めそやす場合によく文学的な引喩を用いて、自己の博学を誇示するような場面もあるが、言葉に詰まりあわてる場面では、知的に見える一面も表面的な、中身の無いものという印象を与え、ずる賢いジョクサーの本質を知ることができる。

追われる身であることを自覚していたジョニーは物理的に現実から逃れることができれば、精神的な苦痛も回避できると信じていたのか、遺産が入れば居を移したいと希望していた。しかし、身を隠し、親戚の家を転々としても心の安らぎは得られなかった。一方、父親とその悪友のジョクサーは目の前の現実から逃れようとしている。ジョニーが見せる切迫感ではなく、ただのりくらしと自分が負わなければならない責任を回避することに全力を注ぐ。一家を支える夫として、また、家族を守る父親としての自覚が欠落している。小言の多い妻の留守を狙ってわずかに残っている食べ物をジョクサーと物色し、得意の航海話に夢中になる。荒れ狂う大海で生死をかけた航海も、今起こっている内戦で戦っているような話もボイルとは全く無縁の状況での自己を作り上げている。空想の中でしか英雄的な行動ができない男はこのような仮面をつけて、我を忘れるほどの酒を飲まなければ己の空虚感を消し去ることはできない。遺産の可能性を信じて、第Ⅱ幕では一家の長に相応しい、金銭的に心配することのない家庭を仕切る夫のようにと、第Ⅰ幕とは異なる態度で夫に接していた妻には、期待していたような夫像、父親像を結局は見出すことはできなかった。ボイルは息子からは罵倒され、メアリが婚約者に逃げられた末に妊娠している

と知ると、自分がどのように中傷され、笑い者の的になるかのみを気に掛ける。酒飲みの父親、男性関係で問題を起こす娘、暴力沙汰に巻き込まれる息子という、アイルランド作品によく見られる家庭環境²⁴におかれたボイルは家族に尊敬されず、家族を守ることでできない典型的な夫の体をさらしている。そのような夫を見限ることにした妻は、息子の死を一人で受け止めなければならない。

一度は情熱を傾けたキャスリーンやロザリーンが今や怒号の悪女へと変わってしまったことで周囲への関心を失い、遠くを見ず、自己保身のために手元しか見なくなったシェーマスも、臆病で弱い自己を覆い隠すためには豪語を並べ立てなければならなかったオレンジ党員の隣人グリグソンも、死を直視できない一面を見せていた。さらに、目の前の責任を負いきれないベンサムは物理的に去って行き、逃げ切れないボイルは酒と空想という隠れ家のさらに奥へと進んでいく。見たくない現実から目をそらし、負いたくない責任から逃れてきたボイルは家族も、友も隣人も失う運命が待ち受けているのみである。この家に侵入してきた隣人の死亡記事と、結果的には夢物語で終わってしまった遺産話もこの一家を破壊してしまうことが分かる。

V

ひとりの主要登場人物を持たないと言われる「ダブリン三部作」では²⁵、さまざまな人物が集合体として大きな印象を残していることが確認できる。それ故、共和国独立をうったえて命を落とした者、或いは、そのために心身に傷を残したまま、戦いの続く祖国で生き続けなければならない者たちの姿が一つのイメージとして集約されている。仮面をつけなければ生きていけない男性が多く登場したなかで、厳しい現実を目の前にして、生き抜くための粘り強さを見せる女性たちがいた。その側面はマディガン夫人、ゴーガン夫人の態度に垣間見ることができる。おせっかいな隣人であるマディガン夫人は、息子の葬儀に向かうタンクレッド夫人にショールを貸し、ジュノーがジョニーの死の知らせを受け取った時にも優しさを見せる。口やかましいゴーガン夫人やベシーもノラに援助の手が必要な時は我を忘れてノラを助けている。それは宗派、支持政治団体を超えて、人としての思いやりの表れである。安アパートの住人はカトリック教徒もいれば、プロテスタント教徒もいた。誰もが独立した共和国を求めたが、同じはずの国を思う心が分離してしまうという結果が小さな共同体の内でもさえも統一されず、さらに、家族までも分散する結果にもなる。結婚という形を捨ててまで、娘と生まれてくる子どものために、現実を受け入れようとするジュノーの生き抜くための強さが、死を多く生み出した戦争を踏み越えていくように描き出されている。それは、クライスローとの愛の結晶を手にすることができなかったノラの思いを引き継ぐ形にもなっている。さらに、祈りの言葉が銃弾の音に替わったことを嘆いていたシェーマスのような人物を慰めることができるのは、*The Plough and the Stars*の第Ⅲ幕の終わりに聞かれたベシーの祈りの言葉がタンクレッド夫人、そしてジュノーの祈りへと継承されていることである。聖母とイエスへの祈りが、息子の死を嘆く母親像をイエスの亡骸を抱く嘆きの聖母像とを同化させ、精神的な暗闇からの微かな脱出の可能性を暗示するものとなっている。

内乱の中で英雄として死んでいった兵士たちの心の奥にある真実が語られない以上、ノラの語った「本当はみんな怖がっている」という言葉は大きな役割を果たしている。真に

祖国のために命を投げ出した愛国者をあざ笑うかのように6年という歳月が経過しても祖国解放という大義は成就していない。残された現実さらなる混乱と、自己満足のための報復戦による同胞同士の殺し合いで、高尚な愛国のための犠牲は皆無である。一人の英兵に戦争におけるフェアプレイを語らさせるのと同様の痛烈な皮肉でもある。ベシーの息子が大陸で戦っているという短い記述は第一次世界大戦への言及と考えられ、大陸での大戦の様子がさながら海を隔てた島国での戦いの中に同化し再現されているかのようである。自由と解放のための戦争は犠牲を伴っても悪ではないという理論から始まった戦争の実態は、その要求するものを明らかにしている。*The Plough and the Stars*の最後では、ベシーへの誤射をなんとも思わない英兵が、ベシーの部屋で、ノラが夫のために準備していたお茶を飲みながら、町が炎に包まれている光景を見ながら大戦の最前線でよく歌われるという歌を歌っていた²⁶。国と国との戦いが妄想的な理想論から始まり、それが間もなく個人レベルにまで落ちる報復戦となり、やがて末端の市民生活のなかにまで侵入していくという、戦争の正体をオケイシーは明らかにしている。1916年の蜂起に対する彼の批判的な視線は、特定の戦争に限らず、実体のない理想論から始まる戦争がどのように広がり、どのような不幸と悲しみが市民の心身のすみずみにまで及んでいるかを伝えている。しかし、人の心を高揚させるロマンティックな思いを受け付けられない殺伐とした社会の中で生き抜く人々のなかに、心の安らぎを求める祈りの言葉と、必要な人に救いの手を差し伸べる優しさは消え去っていないことも確信していることが分かる。

注

- ¹ Garry O'Connor, *Sean O'Casey: A Life* (London: Paladin Books, 1989), p. 155.
- ² Christopher Murray, *A Faber Critical Guide Sean O'Casey* (London: Faber and Faber Ltd., 2002), p. 92.
- ³ 同上, p. 94.
- ⁴ Sean O'Casey, *Three Plays* (London: Pan Books Ltd., 1980), p. 111. 本稿における三作品からの引用はすべてこれに拠る。以後はページのみをカッコ内に示す。
- ⁵ ジム・ラーキンの作った Irish Citizen Army では書記を任されていたが、1914年には辞任。
- ⁶ Christopher Murray, pp. 6-7.
- ⁷ Garry O'Connor, pp. 125-126.
- ⁸ 同上, p. 87.
- ⁹ 配役表には 'The Young Covey' と書かれているが、劇中ではノラから 'Willie' と呼ばれている。
'covey' には スラングとして 'a young fellow' の意味がある (*Webster's Third New International Dictionary*)
'covey' にはダブリンのスラングで「知ったふりをする生意気な自惚れや」という意味がある。(Ronald Ayling, ed., *O'Casey: The Dublin Trilogy*, p. 40.)
- ¹⁰ W. B. Yeats (1865-1939), "The Rose Tree"
- ¹¹ Christopher Murray, p. 99. 元来、労働者保護のために作られた組織である Irish

Citizen Army の旗。鋤の刃に剣のイメージと七つ星が使われ、自由な祖国において、より高いものに憧れる労働者のシンボルとも言われていた。

¹² 同上, p. 106.

¹³ 'fluthered' は 'drunk' の意味。Terence Patrick Dolan, ed., *A Dictionary of Hiberno-English* (Dublin: Gill and Macmillan, 1998), pp. 110-111.

¹⁴ W. B. Yeats, "Easter 1916"

¹⁵ Ronald Ayling, ed., *O'Casey, The Dublin Trilogy* (London: Macmillan Press Ltd., 1985), pp. 157-159.

¹⁶ 同上。

¹⁷ J. C. ベケット著、藤森一明、高橋裕之訳、『アイルランド史』（東京、八潮出版社、1972）、pp. 217-220.

¹⁸ Christopher Murray, pp. 21-22.

¹⁹ Garry O'Connor, p. 127. 反乱軍に対応するために送り込まれた特別軍 'Black and Tans' と 'Auxiliaries' としてこの作品にも登場している。「ブラック・アンド・タンズ」は大戦を経験している元兵士たちが多く、ほとんど規律らしいものがなかったため、Irish Volunteers と Citizen Army が統合されてできた Irish Republican Army を倒すという目的ではテロリストと同様であると言われている。

²⁰ James Clarence Mangan (1803-1849), "Dark Rosaleen"

²¹ John Milton (1608-74), "When I Consider How My Light is Spent"

²² W. B. Yeats, "September 1913"

²³ Ronald Ayling, ed., p. 55.

²⁴ Robert Hogan, *'Since O'Casey' and Other Essays on Irish Drama* (Gerrards Cross, Bucks: Colin Smythe, 1983), p. 60.

²⁵ Christopher Murray, p. 111.

²⁶ Terence Brown, *The Literature of Ireland: Culture and Criticism* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010), pp. 82-83.